

資料から見る

恩納村の沖縄戦(二)

五月号では第三十二軍の資料、恩納村に駐屯した第二十四師団第三十二連隊の戦斗指導要領を通じて、どのように恩納村での戦闘を考えていたかについてご紹介しました。今回は戦争準備について資料から見ていきます。

前回紹介した牛島司令官の訓示の中に「現地自活に徹すべし 極力資材の節用増産、貯蔵等に創意工夫を加えて現地物資を活用して一木一草と雖も之を戦力化すべし」とあるように、ありとあらゆるものが戦争準備に使われていきます。

陣地構築のための坑木伐採のため恩納の山々が破壊

戦後の史実資料「沖縄作戦における第三十二軍史実資料(1) 第二 作戦準備」には「築城及交通」と題して、米軍を迎え撃つ上で築城(陣地構築)を最も重視する事項と位置づけていました。「人員兵器」、「弾薬糧秣(註…食糧)」を収容する場所として一トン爆弾にも堪えるものを作り、その総延長は資料によれば百キロに達したと記されています。また大小の自然洞窟は「軍の築城を容易たらしめたり」と陣地として活用していききました。

陣地構築には多数の坑木が必要となり、「一兵団にて最小限度数十万本」を調達しなければならなかったとしています。しかし本島南部においては「入手し難く」、「国頭山嶽地帯」で調達しないといけない状況でした。よって伐採班と称する木材調達班、またそれを移動させるための馬車輸送、海上輸送班が必要となりました。「地方官民として喜んで軍の作戦に寄与」させるということで、軍隊のみならず、地域住民を徴用で伐採作業に駆り出し、国民学校の高等科の生徒たちには伐採をした木が腐食しないように皮はぎをさせ、馬車を持つ住民には馬車を提供させ、運ばせるなど総動員体制で坑木の確保をすすめます。

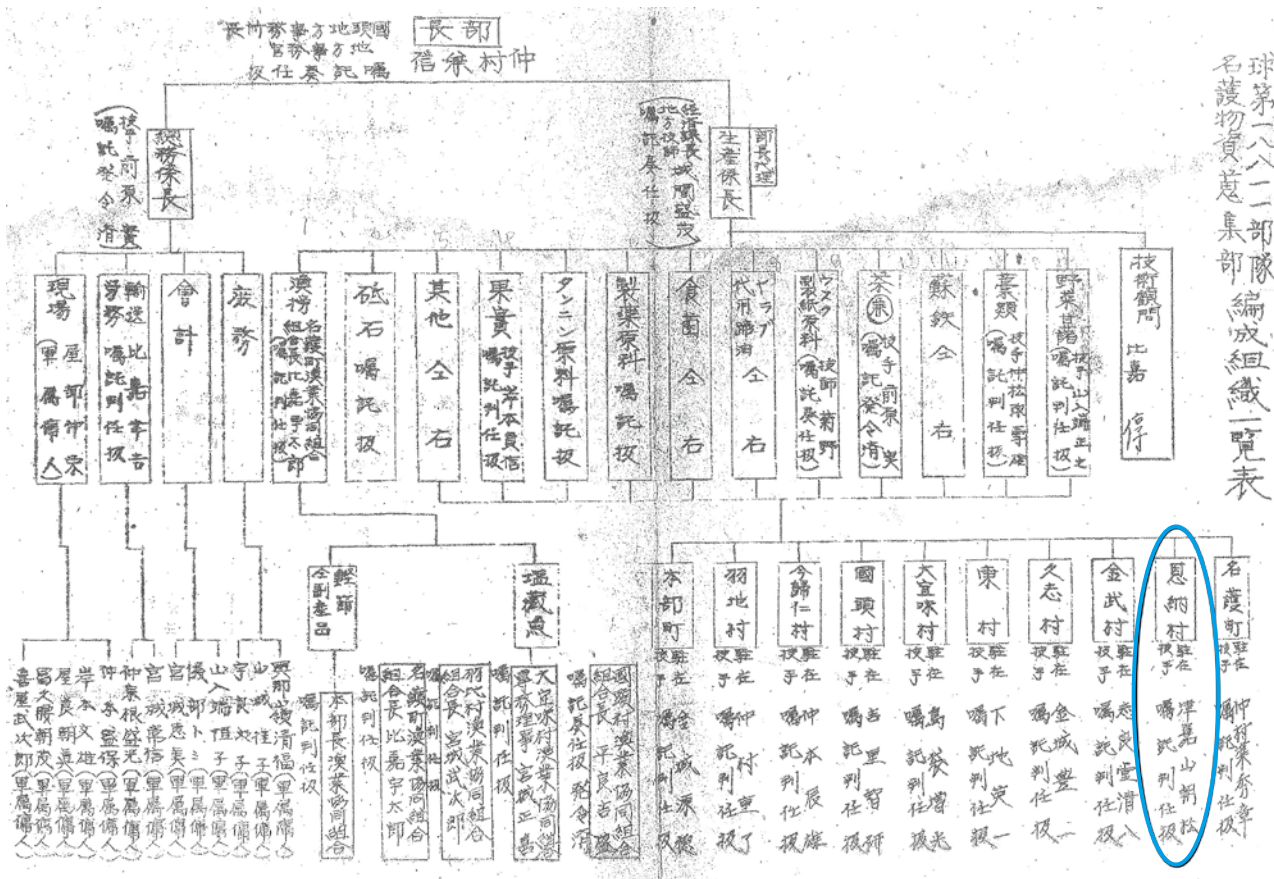


図2 球18811部隊名護物資蒐集部編成一覧表

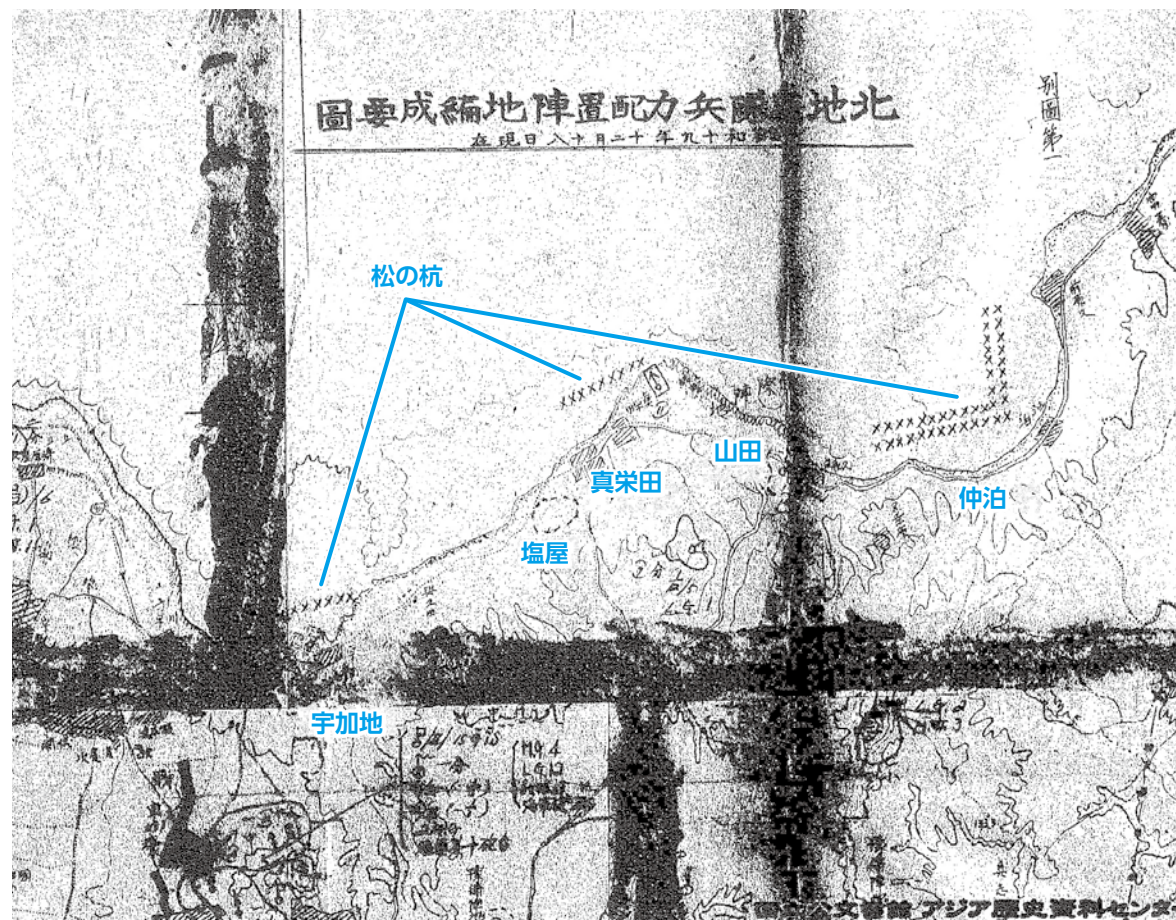


図1 「北地区隊兵力配置陣地編成要図」をもとに作成。 ※仲泊、真栄田、宇加地沖の×印が松の杭です。

よって、恩納間切の山は王府時代、保護育成され美林でしたが、陣地用坑木の伐採によって消滅してしまっています。また陣地構築の坑木だけでなく、米軍上陸を妨害するための杭にも使われていました。恩納村の海岸に松の杭が立てられていたという証言もあり、日本軍の資料にも×印で描かれてあります(図1参照)

軍事物資の調達拠点に

「球第一八八二部隊名護物資蒐集部編成組織一覽表」という資料があります(図2参照)。この第一八八二部隊は第三十二野戦貨物廠(しょう)という部隊で、各部隊に必要な物資を管理補給する部隊です。この資料には「野菜、甘藷」「藁」「蘇鉄」「茶」など食糧をどうやって北部の十村から調達していくかをあらわす組織図です。この調達の実態についてはまだ調査が必要ですが、この物資の調達のしくみをもとに大本営は「領土内(沖縄)ニ於ケル軍糧食自給要領ノ教訓」と題した極秘資料を作成します。この資料は一九四四年十一月の第三十二野戦兵器廠が報告したものをもとに作成されたもので、発信されたのは表紙を見る限り、一九四五年四月二十七日と推定されます。

沖縄本島中部が激しい戦闘に見舞われ、住民の犠牲、日本軍の戦死傷者が激増していく段階での発信です。「教訓」と称しているように沖縄戦での調達の経験を踏まえ、本土決戦での食糧調達の参考資料にしたのではないかと考えられます。

まだまだわからないことも多く、今後も調査を続けてまいります。また村民の皆様からも当時の状況について、ご存知のことや体験など、どんな些細なことでも結構ですので情報をお寄せください。よろしく願います。

(瀬戸)

(参考文献)

- 沖縄作戦における第三十二軍史実資料(1) 第二 作戦準備
- 第三十二軍残務整理課一九四七年三月
- 「第三十二野戦貨物廠命令」一九四五年三月
- 「領土内(沖縄)ニ於ケル軍糧食自給要領ノ教訓」野戦経理長官部一九四五年三月
- 「恩納村誌 自然編」二〇一四年一月
- 「陣中日誌 独立混成第十五連隊第二大隊本部」(自昭和十九年十二月一日 至昭和十九年十二月三十一日)「別図第一 北地区隊兵力配置陣地編成要図」